



Reed L. Wadley, ed. *Histories of the Borneo Environment: Economic, Political and Social Dimensions of Change and Continuity*.

Leiden: KITLV Press, 2005, vi+315p., bibl., index, fig.

本書は、2000年8月にオランダ・ライデンで開催された国際セミナー「ボルネオの先住民および植民地の歴史の中での環境変化——過去からの教訓と将来の展望」の成果である。したがって、執筆者は複数で、歴史学、人類学、地理学などいくつかの異なる専門分野の研究者11名による計11編の論文が本書には収められている。

本書は、R. L. Wadleyによる序章で述べられているように、近年ボルネオ島で進んでいる森林減少・劣化を課題として、過去から今日までにみられた人と自然環境とのかかわりを明らかにしようとする試みである。対象としているおもな「環境」は、ボルネオ島の陸域生態系の中心である森林やそこから採集される林産物である。対象とされている期間、時期は、論文によって異なるが、おおむね11世紀に及んでいる。本書は3部より構成されている。第1部では交易の距離と地元経済についての4編の論文が、第2部では植民地および国家の資源政策についての3編の論文が、第3部では社会変容についての3編の論文が収められている。

各論文の概要を紹介しよう。第1部の1編目の論文は、E. Tagliacozzoによる「沿岸域で、そして森林へ——北西ボルネオの生態史における華人交易の派生、900-1900年」である。サラワク、ブルネイ、サバを対象に華人に焦点を当て、南洋との交易が盛んになった10世紀から19世紀までのボルネオ島における林産物採集・交易や森林開発について描いている。とくに、ヨーロッパ人が到来する16世紀以降、ボルネオ島は徐々に世界経済に組み込まれ、林産物の採集や交易熱はボルネオ島内陸部におよぶようになる。華人は、交易ばかりでなく、入植することにより、鉱山やプランテーションの開発にかかわりボルネオ島の景観を変えていく。それが今日みら

れる大規模で急速な森林景観の変化を引き起こしているひとつの要因になっている。

2編目の論文は、B. Sellatoによる「食のための森、交易のための森——持続性と搾取の間：伝統的人々の経済的実利主義と東カリマンタン北部の交易史」である。近年の自然保護や開発にかかわる言説の中で、しばしば先住民は森林資源を持続的に利用する人々として語られる。この点について著者は、自給のための資源と交易商品としての資源を分けて検討すべきであると主張する。すなわち、自給のための資源は、その所有や利用についての制度が発達しており、持続的に利用されてきた。一方、とくに国際的な交易のための資源は、略奪的に採集されるため非持続的な利用になりやすい。本論文では東カリマンタンを例にとり、17世紀から今日まで交易資源の採集地が沿岸から次第に内陸に移っていく過程、19世紀後半以降の採集にみられた交易のためにおこなわれた略奪的な資源採集を説明している。

3編目は、C. Eghenterによる「保全の歴史か、搾取の歴史か？ インドネシア・ボルネオ島内陸部の事例」である。筆者は、東カリマンタンの最上流部に位置するアボカヤンにおける野生ゴムの一種のグタバーチャと沈香の2つの林産物を事例に、それらがどのように採集されてきたかについて述べている。グタバーチャは1900年代初めに商品価値が高まった野生ゴムである。沈香採集は、1990年代のブーム時に下流の町から大量の外部者が入り、略奪的な採集がおこなわれた。それぞれの採集は、異なるアクターがかかわりおこなわれた。アクターのひとつである地元民ケニヤの対応は、どちらの資源に対しても、それら林産物の分布・生育状況、村内の人々の立場や関係、農業や他の林産物採集を含めた生計のたて方との関係に応じて、時期により、村の状況によって異なっていた。森やその周辺に住む先住民は、森を保全する人々か、あるいは破壊者なのか、といった二分法的な考え方ではなく、場所や時期ごとの文脈を十分に考慮したとらえ方の必要性を述べている。

4編目の論文は、L. Potterによる「植民地期のボルネオ島における商品と環境——経済的価値、森林改変および保全への関心、1870-1940年」である。この間にサラワク、サバ、西カリマンタン、南カリ

マントンでは、森林景観の商品化が急速に進みはじめた。その状況と植民地行政官のかかわりを、グタパーチャ、ジュルトン、タンニンといった林産物の採集や、タバコ、パラゴムといった商品作物の生産を事例にして描写している。ときどきの商品需要に応じて、林産物が大量に採集され、プランテーション開発が進められた。当時からすでに森林の劣化・消失は問題になっており、1900年代初期には、公的な森林行政をつかさどる組織がボルネオのおもな地域におかれた。徐々に森林の評価が科学的に進められるようになる。1920年代には森林の材積量が過大評価されたことがひとつの要因となり、1960年代以降の大規模な商業伐採がおこなわれるようになった。

第2部には、植民地および国家の資源政策について3編の論文が収められている。

1編目の論文は、R. L. Wadleyによる「インドネシア・西カリマントンにおける境界、領域、資源アクセス、1800-2000年」である。境界とは、自然資源や社会・政治的な資源へのアクセス権を確保するために設定される。西カリマントンにおいては、従来からみられた村やエスニックグループのローカルな領域に基づく林産物などの資源の利用がみられた。そこに、植民地政府や国家による境界が入ってくることにより、ローカルな領域の資源アクセス権との間に混乱が生じた。その事例として、1960年代以降、商業伐採が盛んになった時期の境界、近年盛んになった違法伐採と境界について述べ、国家のシンプリケーションによる森林管理失敗について考察している。

2編目の論文は、A. A. Doolittleによる「土地をコントロールする——サバにおける土地所有権と権力闘争、1881-1996年」である。今日のサバにおいて、植民地時代から、その後の近代国家に至るまでの間、森林資源の利用の際に用いられてきた言説を分析している。地元慣習法よりも西洋法を上位において考えられてきた資源へのアクセス、資源の中央政府による管理、プランテーションによる商品作物栽培の正当化と自給作物栽培の焼畑への批判などの事例をあげている。これらの事例から、植民地時代のイギリス人による考え方と、近代国家のエリートたちのよる考え方の類似性を指摘している。

3編目の論文は、M. R. DoveとC. Carpenterによる「17世紀から20世紀の間のインド・マラヤにおける『毒の木』とその見方の変化」である。インド・マラヤ地域の先住民たちが毒の木(*Antiaris toxicaria*)から採取する毒は、吹き矢に塗られて武器として使われていた。植民地時代の初期のヨーロッパ人にとって、その「毒の木」はあらゆる生き物を短時間で殺傷してしまう脅威であり、恐ろしいものとして、ある意味、幻想的に語られていた。しかし、そのような過大な表現は、その後、探検家や研究者によって見直され、次第に野蛮なもの、遅れたものとして記録されるようになった。それは、領土的な植民地支配が進むのに同調してみられたのである。

第3部は、社会変容について論じた3編の論文が収められている。

1編目の論文は、G. N. Appellによる「マレーシア・サバのルングス人の文化生態システムの破壊——西洋イデオロギーがボルネオ島の環境を破壊に導いた歴史」である。サバ州北部のルングス人が住む地域において、北ボルネオ会社が介入してきた19世紀後半から今日に至るルングス人の文化生態システムが変化していく過程と背景を述べている。北ボルネオ会社、植民地政府さらに近代国家のエリートたちによるプランテーションなどの開発により、ルングス人が創り上げてきた森林をベースとする土地景観が破壊された。キリスト教布教に伴い、それまでのルングス人の価値観や認識体系が破壊された。開発、発展、健康といった言説の下に、もともとルングス人にみられた精神と環境のつながりが破壊されてきた経緯が説明されている。

2編目の論文は、M. Janowskiによる「2つの象徴的経済の間の架け橋としての米——サラワク・クラビット高原内あるいは外への移住」である。サラワクの奥地に住むクラビット人は、稲作を中心とした社会を形成している。1960年代から水田化が進み、同時に沿岸の町ミリと空路で結ばれることにより、米が商品として売られるようになる。1980年代以降は、多数のクラビット人がミリへ出稼ぎあるいは移住のため出て行くようになる。町住みのクラビットたちの同郷社会の中では、米は買うものではないと考えられ、故郷より運ばれた米を利用してい

る。町における新たなクラビット社会の形成や村社会の変化など、大きくクラビット社会は変容してきた。このような中で、彼らの象徴的経済の中心として村と町のコミュニティーをつなぐ役割を果たすようになったのが米である。

3編目の論文は、G. Saundersによる「終章——見物人の目、開発か、搾取か？ ボルネオの環境の変わり行く認識」である。ヨーロッパ人、植民地政府、近代国家、地元の先住民などによる環境への見方は不変ではない。その変化の様子を本書に掲載された論文を適宜引用しながら描いている。その中で、近年のとくに大きな変化は、プランテーション開発による大規模な森林減少である。森林劣化・減少の問題は、深刻化してきているが、希望がないわけではない。たとえば、インドネシアでみられる地方分権化により地元先住民の土地や森林への権利が強まることはひとつの明るい兆しになる可能性を指摘している。

以上述べてきた本書の概要からもわかるように、すべての執筆者が多少の差はあれ、今日のボルネオにおける森林資源の劣化・減少を問題と捉え、さらに何人かはそれに伴う地元の先住民らへの社会・文化的な影響に関心事としている。このため、それらと大きな関連がある、ヨーロッパ（おもにイギリスとオランダ）による植民地支配が大きなトピックのひとつとなっている。個々の論文は、森林資源利用について、各調査地域にみられた共通あるいは固有の歴史的経緯が紹介されており、たいへん興味深かった。

今日の森林劣化・減少の問題を考える上で、ボルネオ島をひとつの単位として環境の歴史を扱うのは面白い試みだろう。そこでは、元来、熱帯雨林が広域に分布し、人々の分布も総じて希薄で、内陸部ではダヤクと総称される人々が森林資源に頼りながら暮らしていた。森林利用の地域差もそれほど大きくなかった。ところが、そこに、ヨーロッパの植民地政府が入り、第二次大戦後、今日の国民国家が成立した。本書の複数の地域の状況を扱っている Potter や Tagliacozzo などの論文から、あるいは個別の論文の比較から、植民地期以降の森林や森林資源の利用のされ方は、植民地政府や国家が設定した境界を境に大きく異なることがわかる。私も現地調査の経

験から、ボルネオ島内の森林の状況やそれにかかわる人の動きは一樣ではなく、国や州の境界を境に大きく異なるという印象を持っている。

具体的には、本書のいくつかの論文からもわかるように、インドネシア側では、各地で急速に商業伐採とともにオイルパームプランテーションや石炭採掘などの鉱山開発が進んでいる。保護地域はいくつも設定されているが、違法行為などにより必ずしも適切に森林が管理されているとはいえない。一方、サラワクでも、オイルパームプランテーションはここ20年ほどでだいぶ増えてきたが、まだその割合は小さい。森林保護地区が設けられるとその保全は比較的うまく進む。それに対してサバはすでにオイルパームやアカシアなどによるプランテーションが広大である、といったような違いである。国や州の境を越えて、なぜ、そういった差が出てくるのであろうか。そのような森林利用や管理に違いが生じてくる背景をより深く検討していくことで、今日、なぜ森林の劣化・減少が進行していくのか、また、どうすればよりよい方向へ向かうのかについてのヒントが得られるのではなかろうか。

本書では、Potter など何人かの執筆者は、複数の研究対象地間の事例についてたいへん興味深い比較をおこなっている。しかし、本書全体を通じて、国家間、州間あるいは地域間の比較、分析が十分になされてはいない。終章において、各論文が扱った場所、時期、森林資源への影響とその要因（市場、政府との関係、林産物の採集システムなど）を総合的にまとめ比較するような試みがあれば、各地の状況や位置づけがより浮き彫りになっただろう。

また、森林資源を扱っているので、その利用状況や持続性が評価されるときには、どうしても生物の面からの評価を知りたくなる。本書に、生態学的な視点が入ればさらに興味深い森林への影響についての議論ができたであろう。

上のような指摘点は、本書のように研究集会の結果として、複数の執筆者による論文を編集した場合は、得てして生じやすい問題点である。序章にもふれられているとおり、環境史には複数の研究分野からの視点が不可欠であり、複数によって執筆されるからこそ歴史の多面性が理解できるのである。熱帯での環境史についての研究はまだ歴史が浅い。本書

のような試みを通して、環境史の分野における研究蓄積が増していけば、今日の環境問題の解決へも大きく貢献するであろう。

(市川昌広・総合地球環境学研究所)

David Henley. *Fertility Food and Fever: Population, Economy and Environment in North and Central Sulawesi, 1600-1930*. Leiden: KITLV Press, 2005, 711p.

This voluminous book, written by one of KITLV's researchers, aims to explain demographic change and related environmental transformation in North and Central Sulawesi, during much of its colonial history. The over 700 pages volume is compelling, because of its argument, and because of its extremely rich detail, as the author seems to have unearthed almost every possible source of information that is available on the region. The main thesis of the book is to refute the positive link between demography, productivity and agricultural technology, the Boserup thesis, and suggest a Malthusian mechanism of productivity largely defining demographics, but highly mediated by social cultural and political factors. The 15 chapters of the book painstakingly analyze the many complicated details of this mechanism. The elements of this mechanism include, in the order as they each are presented in separate chapters of the book, disease and mortality, disease control, reproductive fertility, and the link between population and the environment.

About three quarter of the book focus on the demographic history of North and Central Sulawesi, and this constitutes the better part of the book. Summarized, the mechanism that explains demographic is as follows: Disease and poor health causing death, together with low fertility, kept the pre-modern population in a crisis ridden quasi equilibrium. Why a sustained population growth took off since the second half of the 19th

century is one of the overarching questions of the book. Improvements in healthcare, like small pox vaccination and quinine since the early 19th century, and hygiene were for some time outweighed by new diseases like Cholera, or more prominent spreading of malaria as a result of increased migration and trade, related to economic progress and improved transportation networks. Despite these factors, however, the death rates in North and Central Sulawesi regions started to decline during the second half of the 19th century. Food supply was a key factor influencing demographic change. Even though famine was not common in Sulawesi, variations in food supply account for important changes in death rates on account of infant deaths and overall submission to diseases. Hence food is an indirect but key factor in the demographic picture of the regions.

Since the second half of the 19th century, food security increased, largely because of the integration of the region's economy in wider economic networks which also facilitated food trade. The link between food and demographics becomes only clear, however, if cultural and social factors are considered, including slavery, the role of women and ritual feasting. Markets replaced some of these institutions that appear to have been related with assuring food supply and survival. Fertility also appears to have increased with the onset of incipient modernization because social measures to keep fertility down like delayed marriages, abstinence, abortion, and infanticide were abandoned.

Following the debate on the secrets of North and Central Sulawesi demographic history, the volume veers off into a discussion on vegetation cover change and how the population history related to this. This discussion only takes place in the last three chapters. While the chapters again bring together rich source material on vegetation cover change and related changes in agri-

cultural production and its effect on vegetation cover, I was left wondering if these chapters, as most of the book, did not serve mostly the purpose on reporting on the scrutiny of large amounts of source materials, much more so than contributing to an academic debate on demography or the demography environmental link. The chapter that discusses the link between population and the environment explains why North and Central Sulawesi's landscapes have been transformed, but there are no real surprises that rock our insights on these themes. Why there were extensive grasslands in various parts of Kalimantan and Sumatra, for instance, was already known, and the grasslands of North and Central Sulawesi seem to have been created for similar reasons. Similarly disappointing is the final chapter on population and environment. It turns out a hotchpotch of historical facts and superficial interpretations related to people's resource user and links with the environment.

The book is a valuable contribution to understanding the demographic history of an important but less emphasized region of Southeast Asia. The rich use of many sources makes this a valuable book that will be useful to people interested in the region and on its archival material, much of which is only in Dutch. The important theoretical contributions are the reflections of the complex mechanisms that define a region's demographic history, but the environmental history analysis and interpretations provide few new insights. The demographic histories, distinguished for sub-regions, are a result of complicated causal interlinking of productive, social, cultural political and health factors, that are perhaps much more difficult to generalize as is often assumed. This point would have become more articulated had the volume been limited to that purpose. The chapters on environmental change and its social causes are not very articulated, and this puts into question the environmental histo-

ry project that the book attempted in addition to pursuing a historical demography project. (Wil de Jong • Center for Integrated Area Studies, Kyoto University)

Adrian C Sleight; Chee Heng Leng; Brenda SA Yeoh; Phua Kai Hong; and Rachel Safman, eds. *Population Dynamics and Infectious Diseases in Asia*. Singapore: World Scientific Publishing Co., 2006, 430p.+index.

I はじめに

総勢 36 名の執筆者による本書の土台となっているのは、2004 年 10 月にシンガポールで開催された国際ワークショップで発表された論文集である。このワークショップは、アジアの感染症について分野を超えての相互情報交換や知見交流が不足している状況を打開する試みとして、シンガポール国立大学の Asian MetaCentre for Population and Sustainable Development Analysis とオーストラリア国立大学の National Centre for Epidemiology and Population Health 共催で、アジア、オセアニア、欧米各国から 40 名を超える研究者を招いて行われた。本書は、ディシプリンを横断した知見交換や知識の共有の促進のみならず、統合的アプローチの確立に果敢に挑戦している点で、各分野の研究者に良い刺激を与える稀な書と言える。

本書は近年みられる感染症の発生傾向を説明する要因として、移動人口を構成する女性の比率の急増と都市化という近年アジア地域で顕著な 2 点に主眼をおいている。具体例として、1975 年時点で 25% を示していたアジアの都市人口が、2030 年には 53% に上昇すると予想し、急速に進行する都市化現象が人々の生活、行動や価値観、政治、経済に多大なインパクトを与えていると指摘する。さらに、このアジアの都市化による環境汚染は、今後死亡率上昇と出生率低下を加速するおそれがあると主張する。マラリアなどの薬剤耐性が懸念されるなか、HIV 感染者の結核症例が増加し、重症急性呼吸器症候群 (SARS)、高病原性鳥インフルエンザ、ニパウィルスなどの新興感染症例も加わり、広範囲化し

つつあるデング熱も深刻である。これらの人類を脅かす感染症が、社会や環境生態の変化と深く関係していることを明らかにしながら、本書は地域研究者をはじめとして、医療従事者や科学者、また保健政策、開発や環境問題などに取り組む多くの読者に、アジアの将来を考える好機を提供している。

II 各章の概要

第1セクションの序章は各章の論点を集約するとともに、アジア地域の人口の変動と感染症の増加という2点を同時に論ずる新たな試みには、ディシプリンを架橋したアプローチが必要だと強く唱える。続く第2セクションでは人口変動と感染症増加の関連を概観する。まず2章が感染源となる微生物のアジアとヨーロッパ間の移動を示し、現在第7次流行期にあるコレラなどを例に、グローバル化がアジア地域の感染症に及ぼした影響を考察しながら、人と生態系の共存の必要性を唱える。3章は地理情報システムや疫学を用い、移民が未知の感染源と遭遇した際に、過去の習慣や経験をもとに対応することが感染を増幅させていることを示す。4章は水資源汚染、食糧需要の増大、砂漠化と都市化がダム建設を助長し、世界中で20世紀に建設された大型ダムの多くが中国とインドにあると指摘する。周辺住民は居住地移動を余儀なくされ、大量の人口移動の結果急増した住血吸虫症、マラリア、肺炎や下痢などの感染症は、ダム建設で謳われる社会経済効果の負の産物であると証明する。5章はワクチンで予防可能、不可能な2タイプに輸入感染症を分類し、最適な公衆衛生政策がそれぞれ異なることを感染率モデルで説明する。6章は新興感染症対策の枢要部といえるヘルスシステムが、アジア地域では各国ごとに大きく異なる医療技術と財政状況の制約を強く受けていることに着目し、公共政策導入費用の試算と、感染症対策に必要な公的投資額の決定方法を提示する。

開発と感染症の関連を解く第3セクションでは、7章が1950年代以前に上海で蔓延した感染症に対して導入された公衆衛生施策の成功を報告する一方で、近年の新・再興感染症の発生増加傾向と、貧困層の移民に顕著な麻疹の増加傾向を示す。8章はベ

トナム北部ラオカイで社会変化が山岳地の住民にもたらした感染症拡大の影響と実態を、医療人類学的手法で巧みに描く。9章は北タイで、HIV感染症患者とエイズ患者を支援するNGOのプログラムと医療システムが人々の移動パターンに影響し、その結果支援活動領域から取りこぼされる人々を生むことを指摘して、新たな支援プログラムの実現を唱える。10章は1985年の国内初の感染者確認以降、HIV感染者やエイズ患者の治療や看護よりは、自己責任を強調して予防に重点を置いてきた都市国家シンガポールの最近の動向を描く。市民グループによるアドボカシーを通じて生まれた、患者たちの権利を尊重し社会活動を支持する最近の世論は、独立後の国家統合の過程で政府の影響を強く受けて形成された国民共有価値や社会概念とは明らかに違う。これは、市民の意思が政策の方向転換を促しつつあるという、この国には珍しい事例である。

人口移動と感染症の関連を究明する第4セクションの11章は、2000年に建設された、北西ラオスを通過して中国とメコン川流域やタイを結ぶ、全長74キロメートルの高速道路をとりあげる。2村落の比較分析をもとに、アイディアや人と物の移動の加速が住民コミュニティと移住者それぞれのセックスネットワークを拡大し、HIV感染を含む性感染症の危険性を高めていると訴える。12章は中国河南省の貧困農村出身の出稼ぎ移民の結核感染に焦点をあて、疫学調査手法を応用した家計調査結果の回帰分析から結核が家計に及ぼす損失を算出した。さらにこの章は、中国農村にはびこる貧困と結核の悪循環を指摘し、患者の生活支援のための貧困撲滅プログラム導入を主張する。13章は中国南西部から都市部へ短期移住する女性を対象とする。移民という社会的立場とジェンダー的に弱い力関係が相互作用して、経済的困難をかかえる彼女たちを危険な性産業に追い込んでいる図式を示し、性感染症のリスクが高まっていると帰結する。彼女たちは数年後には出身村に戻って結婚し感染症の拡大源になる懸念があり、事態は極めて深刻といえよう。14章は毎年2百万人を超えるイスラム教徒の巡礼によって起こる混雑した環境での、結核、髄膜炎やB型肝炎などの感染症発生率の増加結果を報告し、感染症リスクと大量人口移動の関連を強く示唆する。アジア地域在住

の巡礼者がそれぞれの母国に感染症を持ち帰ることが危惧されることから、予防接種の普及を提示するとともに、国家間の公衆衛生の課題を指摘する。

SARSを比較の視点から捉える第5セクションでは、15章がシンガポールでの既存の感染症に加えて新興感染症に対する注意を喚起する。省庁を超えた危機管理体制や迅速な意思決定、実験室を発端とした感染例や国境での監視体制からの教訓は、アジア地域に参考となるであろう。16章は香港の高層集合住宅7棟で、工学的に再現した実験を行い噴霧分散感染の可能性を検証し、高層住宅の建築デザインと住宅政策に対する警告を発する。17章は、台湾の新聞報道で使われた差別表現がスティグマを形成した過程を考察し、患者や医療関係者が誹謗中傷的に据えられた要因をつきとめる。18章はマレーシア政府が感染地域への渡航注意を喚起する一方で、自国の経済損失を縮小する目的で極度なリスク回避行動を緩和しようとした2重基準が、国内の感染リスクの認識をゆがめ人々を混乱させたと分析した上で、隣国シンガポールが貫いた情報開示の姿勢を評価する。19章は植民地時代に蔓延していた感染症を1970年代にはほぼ制圧したと評価する一方で、シンガポール政府は感染症に関する表現に軍事用語を乱用したと述べる。感染拡大を国家的危機と位置づけることで、政府は自らの正当性強化と国家建設に利用したとする批判的な主張を展開する。20章はSARSによって表面化した中国政府の情報隠蔽の根源として、農村部の脆弱なヘルスシステムと民工制度を作り出した、政治経済と農村開発を指摘する。都市と農村部を行き交う大量の移住労働者は、病原菌の宿主や媒介となる危険をはらむことから、政府は近年地方レベルの公共財を増やすことで問題解決を試みてきたが、統治体制の弱さが制度改革を困難にしていると判断する。

最終章の21章は1997年に香港で発見され広範囲に拡大する高病原性鳥インフルエンザ(H5N1型)を扱う第6セクションを構成し、これまでの議論を整理した上で、本書の総括の役割を果たす。ヒト-ヒト感染の発生は多くの人命と経済損失、そして膨大な医療費を意味する。国境を越える人々の移動の加速と、各国を取り巻く感染症対策の制約や差異を熟考すると、新型ウイルスの産出地になるか、もし

くは甚大な被害が予想されるアジア地域において、それぞれの国ごとの解決に委ねては感染症拡大を阻止できないと指摘する。アジア全域でヘルスシステム強化のために必要な投資を支援しあうという、一刻も早い決断を呼びかけて本書の主張をまとめている。

III 本書の批評と特筆点

本書はこれまで同時に扱われることが少なかったアジアの人口構成の変動と感染症という2事項について、医学、歴史学、社会学、人類学、地理学、経済学、政治学、工学や数学など多分野からの理論的そして実証的研究を統合している。しかし視座の多様性を活かしきれずにテーマが開発や経済に傾斜しすぎている章や、理論重視で実証研究を欠く章もみられる。また統合的アプローチであるがゆえに、16章の実験のように建築学の知識が乏しい読者には難解な分析結果も含まれている。現代問題を扱う研究がしばしば直面することだが、最新のデータを提供できていない箇所や、政治環境の制約から裏づけが弱いデータもある。とくに統計分析で比較の妥当性を高めるためには、人口増減に起因する症例の詳しいデータを収集することが今後の課題であろう。感染症を病名別に考察する際には、伝統医療が普及している地域での診断基準が、近代医療とは必ずしも一致しないことにも留意するべきである。また13章では移民、性産業従事と都会での孤立などの要素の因果関係が特定されないまま分析が進められるため、複数の指標を使った豊富な聞き取り調査にもかかわらず、結果の解釈に疑問の余地を生みかねない。19章はシンガポール政府が意図的に軍事用語を感染症対策に適用して政治利用したとするが、病気と闘うなどの表現はごく一般的に使われることから、この批判が適当かどうかは読者の意見が分かれるところであろう。

とはいえ、本書が明瞭な警告や具体的な提言を数多く唱えている点は評価に値する功績だろう。たとえば、人間の活動が起因となっている環境破壊に対する政治的な無知や否認の指摘をはじめとして、健康政策の比較研究の必要性を説く姿勢や、地域全体を視野に入れた提案を主導する論旨には、アジアの

医療体制向上や国際協調の重要性の熟考を促す説得力がある。これまでの先行研究の多くは、家畜との共生や人口密集を理由に、東南アジア地域が感染症の発生現場になりやすいと指摘するにとどまっている。しかし、本書はアジア地域での国境を越えた人々の移動急増と規模の拡大、並びに急速に進む都市化現象が、環境生態系に多大な影響を与えている

ことを明確にしている。そのうえで、多方面のディシプリンの立場から行われた研究成果を統合することで、人口構成の変容と感染症の複雑な関係を見事に浮き彫りにし、アジア全体の問題解決を試みている点が画期的と言えよう。

(吉川みな子・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)